



日本人とリスク対応

飯塚 哲哉

ザインエレクトロニクス
取締役社長

生きとし生けるものにとり、リスクとどう折り合いを付けるかは不可避で最大の課題である。進化の歴史はその結果の幸福と悲劇の物語と言える。頂点に立つ人類も例外ではないが、その処理法は国によってまったく異なるようだ。わが国の特徴は、リスクからはひたすら逃避。完全なる安全志向が異常に強く、そのためにかえって安全や好機を損なってははいないだろうか。

今回の震災に伴う原発事故の原因はリスク対応にある。3月11日、日本を襲った東日本大震災は天災である。M9.0という激震に加え、津波・原発事故という三重の災いに、被災された国民は処理しきれないほどの喪失感と焦燥感を味わいながら、長期の復興作業と格闘している。事態を長期化、深刻化しているのは、人災とも言える原発事故だ。人災と呼ぶゆえんは、リスクのとらえ方に深刻な問題があったと思われるからだ。ヒトが知り得た史実に基づけば、起こり得る天災リスクの想定は過小であり、設計を決定するスペックが不適切だった。また、深刻な災害発生後のシナリオもなかった。さらに30年超の稼働期間に生み出された多くの技術革新による改善も不十分だった。これらの根本の原因は、原発推進・反対派間の「リスク＝1か0か」の議論に埋没し、もともと安全性は有限という事実を否定せざるを得なかったことではないか。

リスクはリターンのもとならぬことは欧米では常識だ。投資やビジネスの世界では、リスクをどうヘッジするか、知恵の限りを尽くした努力がなされている。わが国はここでも絶対的な安定志向が突出して優勢である。就活、キャリアプランしかり。ベンチャーも育ち難い。それが伝統の優良企業の国際競争力をも削いでいる。リスクと折り合いを付けることがイノベーション創出の国際競争で勝ち抜く基本の必要条件ではないか。

しかし日本は「あらかじめ」の対応ではなく、現実化してしまったリスクや、外圧の前で立ち直る高い能力を何度も証明してきた。スマートか否かは別として、それが得意技なのかもしれない。90年以降からの長期低迷の末のあまりに無慈悲で不幸な災害だが、必ずや目を見張るような復興を実現してゆくことを期待している。